

感染症発生動向調査委員会報告 4月

今月のトピックス

- 季節性インフルエンザは終息傾向にあります。
- 2008年4月～12月のMRワクチン接種率は、第 期63.9%、第 期63.5%、第 期45.0%でした。2009年度対象者には早期の接種をお勧めください。
- 伝染性紅斑が例年よりやや高めの水準です。

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点:88か所、内科定点:57か所、眼科定点:18か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計192か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計145定点から報告されます。

平成21年 週 - 月日対照表

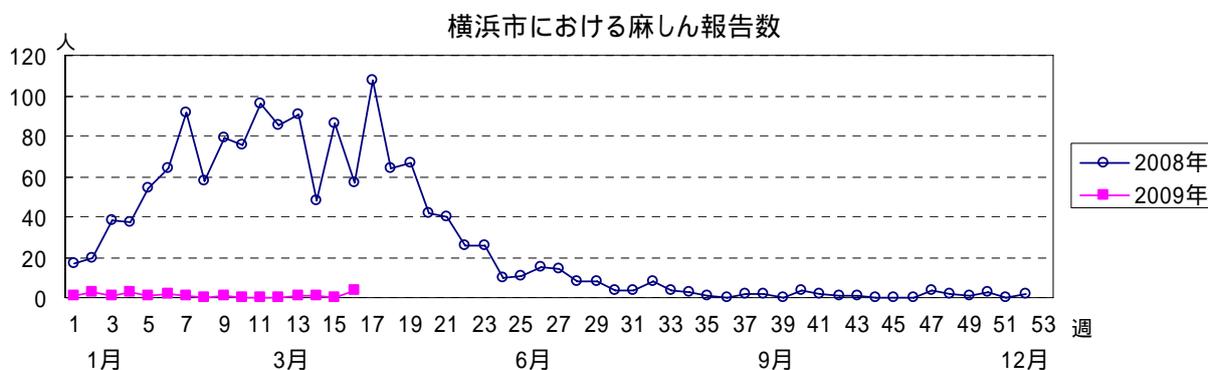
| | |
|------|------------|
| 第13週 | 3月23～29日 |
| 第14週 | 3月30日～4月5日 |
| 第15週 | 4月6～12日 |
| 第16週 | 4月13～19日 |

平成21年3月23日から4月19日まで(平成21年第13週から第16週まで。ただし、性感染症については平成21年3月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

全数把握の対象

< 麻しん >

2008年から感染症法における5類感染症の全数把握の対象となり、診断した医師すべてに届出が義務付けられました。(国立感染症研究所ホームページ <http://idsc.nih.gov.jp/disease/measles/index.html>)



2009年4月は22日現在で6例の報告があり、4例は予防接種を1回受けていました。

ひと月で100例以上の報告があった2008年に比べてかなり少なくなっていますが、未だ患者発生がありますので、予防接種を1回受けていても、麻しんにかかっていない方は予防接種を生涯2回受けることが大切です。

横浜市の詳細については、「横浜市における麻しん患者届出状況」

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/measles/measles.html> をご覧ください。

2012年の麻しん排除に向けて、予防接種の徹底が最も大切です。

〔日本は、2008年～2012年の5年間で、麻しん排除を目指します〕

風しんとともに全数報告疾患として、発生状況等を詳細に把握
1歳および就学前1年間の、麻しん風しん混合ワクチンによる2回接種の徹底
5年間に限り、中1及び高3相当の年齢の者への定期接種を実施

定点把握の対象

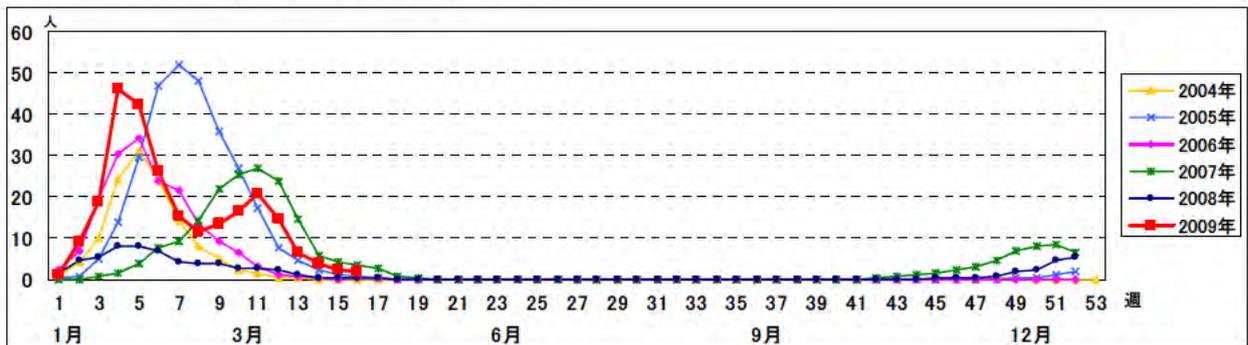
<インフルエンザ>

今シーズンは、過去5年間で最も流行開始が早かった昨シーズンに次いで早く、2008年第49週に流行の目安となる「定点あたり報告数1.0」を超え、2009年第3週に横浜市全域が注意報レベルの流行となり、第4週にはさらに増加し、警報レベルの流行となりました。

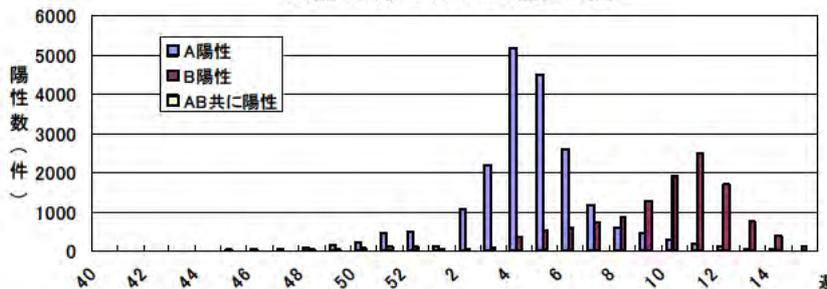
その後は減少しましたが、第9週から再び増加に転じ、第11週に定点あたり報告数20.69となりました。その後減少し、第16週は1.78と警報解除の水準となりました。行政区別では、港北区(3.90)、緑区(3.20)、神奈川区(3.17)の順で多く報告されています。神奈川県は2.36、東京都は3.46、全国は4.1でした。

迅速診断用検査キットによる型別の集計では、第4週をピークに減少し第16週にはA型36件、B型145件、

A・B共に陽性4件の報告で、B型が優勢です。



横浜市内の患者定点医療機関における迅速診断用検査キットによる型別の判定



また、2008年第46週以降、病原体定点の検体からのインフルエンザウイルスの分離・検出数は併せて188件あり、その内訳はAH1(ソ連型)77件(41%)、AH3(香港型)41件(22%)、B型70件(37%)となっています。

AH1(ソ連型)分離株(病原体定点及び集団かぜ)は遺伝子解析を行った96件すべてからオセルタミビル耐性を示唆する遺伝子変異が認められました。また、AH3(香港型)分離株(病原体定点及び集団かぜ)は、遺伝子解析を行った35件すべてにアマンタジン耐性を示唆する遺伝子変異が認められました(4月22日現在)。

<A群溶血性レンサ球菌咽頭炎>

去年は、過去5年間で最も高い水準で推移していましたが、今年に入ってから例年並みの水準で推移していて、第16週は1.54でした。行政区別では緑区(6.00)が高く、次いで瀬谷区(2.75)、港北区(2.71)となっています。神奈川県は1.68、東京都は1.5、全国は1.91でした。

<感染性胃腸炎>

去年は、第43週から増加の兆しが見られ、第51週の定点あたり報告数は18.51と、今シーズンで最も高い値となりました。その後減少し、2009年第16週は5.87となりましたが、依然ノロウイルス、ロタウイルス、サボウウイルスによる集団感染の報告もありますので注意が必要です。行政区別では港南区(13.0)、旭区(10.80)、港北区(10.71)が高くなっています。神奈川県は6.93、東京都は7.34、全国は8.48と、いずれも横浜市より高い値です。

< 水痘 >

例年、年末年始にかけて発生が増加しますが、2009年第2週の定点あたり報告数は3.67と、過去5年間で最も高い値となりました。その後減少し、第16週は1.59と、現在は例年並みの水準で推移しています。例年、初夏にかけて流行しますので注意が必要です。行政区別では港南区(3.00)、泉区(2.75)、瀬谷区(2.75)が高くなっています。神奈川県は1.58、東京都は1.08、全国は1.58でした。

< 伝染性紅斑 >

例年並みの水準で推移していましたが、第13週から増加し、第16週は定点あたり0.53と、例年より高めの水準となっています。全国では、過去5年間の同時期と比較して低い水準で推移していて、第16週は定点あたり0.12でした。例年、6月頃が一番高いようですので、今後の動向には注意が必要です。

< 性感染症 >

性感染症は、産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

3月は、2月に比べて全体としては横ばいですが、性器クラミジア感染症がやや減少しています。19歳以下の若年層については、男性は性器ヘルペスウイルス感染症で2例でした。

* 2009年4月30日現在、「新型インフルエンザ」の発生報告はありませんでした。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点:8 か所、インフルエンザ(内科)定点:5 か所、眼科定点:1 か所、基幹(病院)定点:3 か所、の計 17 か所を設定しています。検体採取は、小児科定点 8 か所を 2 グループに分け、4 か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

衛生研究所から

< ウイルス検査 >

2009年4月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点51件(鼻咽頭ぬぐい液36件、うがい液1件、糞便4件、直腸ぬぐい液9件、嘔吐物1件)、眼科定点1件(結膜ぬぐい液)、基幹定点2件(糞便、血清各1件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎28人、関節痛3人、胃腸炎(下痢・嘔吐含む)13人、発疹6人、腫脹1人、眼科定点は急性角結膜炎、基幹定点は心筋炎でした。

5月8日現在、小児科定点では、気道炎患者9人、関節痛患者1人からインフルエンザウイルスB型、別の関節痛患者1人からインフルエンザウイルスAH1型が分離されています。これ以外にPCR検査では、小児科定点の気道炎患者1人からヒトメタニューモウイルス、発疹患者1人からヒトヘルペスウイルス6型、胃腸炎患者2人からロタウイルスA群の遺伝子が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

< 細菌検査 >

4月の感染性胃腸炎関係の受付は7件で起因菌は検出されませんでした。菌株受付は9株で病原性大腸菌および毒素原性大腸菌が各1件検出されました。溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は7件でA群溶血性レンサ球菌が6件検出されました。また、髄膜炎由来の受付は1株でインフルエンザ菌でした。

【新型インフルエンザの情報】

2009年5月20日現在、新型インフルエンザ関連の検体の検査を約90件行いました。
現在まで、RT-PCR検査でInfluenza A(H1N1)は、検出されていません。